

## ＜書評＞

小杉礼子・宮本みち子編著

『下層化する女性たち

——労働と家庭からの排除と貧困』

(勁草書房 2015年 292頁 ISBN: 978-4-326653942 2500円＋税)

林 亜 美



本書は、近年急激に深刻化してきた若年女性の「下層化」の問題を正面から取り上げた研究書である。2013年7月と2014年6月に開催されたシンポジウム「労働政策フォーラム」をもとに書き下ろされた。若年女性が下層化している現状やその要因を、12名の研究者と支援者がそれぞれの立場から論じている。

近年、正規と非正規の賃金や労働条件等の格差問題は、若者が非正規労働市場に大量に流入したことによって社会的に注目を集めた。しかし「女性労働の家族依存モデル」が支配的であるため、問題は若年男性のみに焦点化されていた。本書は、従来家庭に包摂されることで不可視化されてきた若年女性に着目し、増加し続ける非正規雇用者の大半を占める女性が、家庭にも労働市場にも包摂されず、下層化している現状を明らかにする。

本書は三部8章で構成される。第Ⅰ部は3章から成り、女性労働の抱える問題と若年女性特有の問題を「女性労働の家族依存モデル」の限界として、理論的整理を行う。第Ⅱ部は、現場での支援にかかわってきた研究者による調査から、女性ホームレスや貧困女性の実態を分析する2つの章から成る。第Ⅲ部は3章構成で、支援者による報告である。三つの団体から見た女性の下層化の実態と支援の取り組みを紹介する。また、家族社会学、教育社会学の研究者による実証分析に基づくコラムが各部末に配されている。以下、大まかな内容と主要な論点を紹介する。

序章では、本書の課題設定が行われている。ここでは女性の貧困とは、経済的困窮のみを問題にしているのではないと強調し、このような女性たちの特徴を「労働と家庭からの排除」としてとらえている。そして下層化する女性に特徴的にみられるのは、様々な暴力に晒されていることだと指摘する。貧困化していく女性が増加する社会は、貧困化する母子世帯の増加をもたらす、家族などの身内をもてない低所得で社会的にも孤立する中年期・高齢期の女性の増加につながる。そこで若年女性の貧困化を阻止するうえで職業教育・訓練と就労支援などの積極的労働政策が重要だと述べている。

第Ⅰ部では、若年女性が労働と家族から排除されている現状と課題について理論的に整理をする。第一章では、「女性労働の家族依存モデル」が事実上破たんをきたしていることを検証する。戦後の日本社会は、女性労働が女性の属する家族に包摂されていることが前提で組み立てられていた。しかし、若年女性の包摂先である「労働」、そして、「夫」や「親」という「家族」の全てから排除される女性の出現は、その前提がもはや限界を迎えているとし、加えて、現実にはどの選択肢を選んでも困難が待ち構えているため、労働や親の状況、配偶者の男性の状況のすべてを考慮に入れた社会政策の必要性を主張する。

第二章では、見えにくい女性の貧困の中でも、特に「若年女性の貧困」が見えにくい問題であることを様々なデータより論証している。女性の貧困化が見えないことの意味は「見えていても社会問題として取り上げるに値しないと見なされている」ことであると主張する。現在の若年女性は「家庭に入る」

こと、「働き続ける」ことのどちらを選択したとしても「貧困化」のリスクから逃れることはできない。日本社会における非正規労働者の待遇が「女性労働の家族依存モデル」を前提としていること、このような性差別的な社会構造が成立していること自体が問題であると指摘する。

第三章では、「女・女格差」の拡大が「次世代再生産格差の固定化」を生んでいることを説明している。本章では、「勝ち組」である一部の高学歴キャリアの女性に着目し、「勝ち組」の中にも生きにくさやメンタルヘルス系の問題を抱えている女性が多数いることを明らかにしている。その背景にあるのは、「労働と生むこととの間の根源的な矛盾」(p.74) であるとし、それを自助努力で乗り越えよと迫られる現状が「働くのも生むのも怖い」と女性たちに言わしめている。スピヴァクの言葉を引用して、女性身体の「再領土化」「巻き込まれ」への危機感と見るべきであると論じている。

第Ⅱ部では、貧困化する女性の実態を取り上げている。第四章では、女性ホームレスに着目し、女性の貧困の現状と困難を抱えた女性たちの生活史の特徴をみる。本章は自立生活センター・もやいに寄せられた相談ケースを分析しているが、相談者への調査結果から女性の貧困と暴力とは密接な関係にあることを浮かび上がらせる。そして、ホームレスという最も下層にある女性と専業主婦や主婦パートは、一見隔てられた世界にいるようにみえながらも、実際には「運」でつながれた表裏であるとする。暴力を振るわない安定的な仕事についている夫と結婚できたこと、早くから介護が必要でない健康的な両親であったこと、豊かで思いやりのある両親のもとに生まれることは、「運」がよかっただけであると述べる。著者はこのような女性の貧困現状の改善のために二つの政策を提案している。女性が経済的に自立できる条件を整えることと、子育てにかかる費用を社会的に負担する仕組みの必要性である。ホームレスの女性たちには自炊や金銭管理などの生活習慣の欠如があり、そのような生活習慣を身につけるための支援の有効性を指摘している。

第五章では、若年女性のホームレス化と貧困について、三人の女性のケースから様々な困難が折り重なっていることを明らかにする。もやい代表の湯浅誠が提唱した、教育課程、企業福祉、家庭福祉、公的福祉、そして自分自身からの「五重の排除」に加えて、ジェンダーと社会からの排除を踏まえて、若年女性たちの置かれている困難な構造を検討する。家庭は女性を包摂し、生活の保障をする場であるはずが、貧困女性にとっての家庭は搾取される場であり、虐待や暴力に晒される場となっていることを指摘している。

第Ⅲ部では、現場の支援者からの実態報告であり、自治体による支援の取り組みを紹介している。第六章では、二十四時間年中無休で匿名相談が可能な無料電話相談の「よりそいホットライン」の活動から見てきた、若年女性の「下層化」と性暴力被害についての報告である。女性専門ラインの相談内容はDVがトップで、DVと性暴力被害の相談が全体の7割を超えるという。性暴力を受けている主な相談者は10代から20代の女性であり、その加害者は実父がほとんどであるという衝撃的なデータを示している。

第七章では、大阪府豊中市のパーソナルサポート事業の現場から、生活困窮状態にある10代女性の現状と彼女たちにとって必要な包括支援について紹介している。同事業は学校と連携し、定時制高校の中に緊急度の高い女子生徒たちが安心できる居場所を作り、就労・自立支援を行っていた。しかし、次第に携帯がなくなると、知らぬ間に中退して、彼女たちを見失っていく例が多いという。自立支援は「就職の成功」だけがフォーカスされがちだが、10代の若年者であれば健康やライフラインの確保が必要不可欠であり、自己肯定感や職業意識の醸成が、その後五十年の人生を自立的に生きていくた

めの根幹になると論じる。

第八章は、生きづらさを抱えた未婚若年女性たちのつながりの「場」として運営されている、横浜市男女共同参画センターの“ガールズ”支援の取り組みの報告である。就労体験プログラム「めぐカフェ」は、一般客も利用するが、スタッフが見守る「中間的就労」の場となっている。就労体験修了者の追跡調査では、半数以上が就労することができたという。しかし、同センターの職員である筆者は、彼女たちが就労することだけが成果ではないとし、「人とのつながりを増やして、SOSを出しながらなんとかやっつけていけることが自立ではないか」(p.239)と指摘する。

終章では、本書の総括を行う。筆者はまず、男性の働き方を変えることが必要であり、男性稼ぎ主モデルではなく夫婦共働き世帯モデルを基準にすべきだと強調する。そして、貧困の連鎖を断つために学校教育の全うを挙げ、労働行政と教育行政の連携を主張する。

以上、各章を概観したことで明らかになった本書の優れた特性は「女性の下層化」の実態を研究者と支援者によって、鮮やかに可視化することに成功した点である。では、「下層化する女性たち」をどのようにして下層化から食い止めるのか。この本質的な問いへの答えは、本書においては明確に示されたとはいえない。この問いを考察することは、「どのように向き合っていくのか」という、受け手のあり方を問う試みともいえよう。

本書では、近年議論に挙がることで社会的認識の進んだ「貧困」ではなく、「下層」という言葉を使用している。「下層化」とは、経済的困窮のみを指すだけではなく、労働においても家庭においても搾取され、様々な暴力に晒されている状態を含んでおり、現在の若年女性が直面している「労働と家庭からの排除」の状態を示している。しかし、あくまでも私見ではあるが、「下層化」という言葉は本書において明確に定義化されたとはいえないため、今後より洗練されるよう議論を期待したい。

湯浅誠(2008)は、アマルティア・セン(Amartya Sen)の「潜在能力」に相当する概念を“溜め”という言葉で語っている(pp.78-79)。多くの困難を抱えている女性たちが自立するためには、金銭や頼れる家族・友人などの人間関係、自己肯定感といった有形・無形の“溜め”の機能が必要であると指摘する。“溜め”は、従来の「家族機能」に埋め込まれて不可視化されてきたものだともいえる。社会や人とつながることのできる「場」や人間関係の構築や精神的な安定などの“溜め”があることによって、就労する意欲が沸き、支援を利用することが初めて可能となる。下層化する女性たちへの支援は、“溜め”を充実させる諸条件の整備を含めて、今後新たに検討する必要があるだろう。

若年女性の貧困問題は、現状分析において未だデータ蓄積の数少ない領域である。これまで注目されなかった若年女性の困窮している現状に真正面から取り組み、下層化の要因を理論と実証分析した本書の社会的意義は大きい。今後も研究者と支援者とが連携し、研究の継続と効果的な支援策定を期待したい。ジェンダー研究者は勿論、多くの人に一読を薦めたい一冊である。

## 参考文献

湯浅誠『反貧困——「すべり台社会」からの脱出』岩波新書、2008年。

(はやし・あみ／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科  
ジェンダー学際研究専攻博士後期課程)

掲載決定日：2016(平成28年)10月20日